

和束町史編さん事業
資料調査報告書
第5号



相楽東部広域連合教育委員会
令和7年3月

目 次

ごあいさつ	1
1 編さんだよりを振り返る	2 ~ 11
2 祭礼調査	12 ~ 13
3 東大寺俊乗堂愛染明王坐像の調査	14 ~ 15
4 町史編さん室から	16

表紙写真 和束町上空から撮影（2024年12月20日撮影）

*過去の『資料調査報告書』は、和束町史編さん室のホームページからダウンロードできます。（<https://www.union.sourakutoubu.lg.jp>）

ごあいさつ

和東町民の皆様をはじめ、町史関係者の皆様には、和東町史編さん事業の推進に、ご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

町史の編さんは、地域社会における「人づくり」の一環であり、ふるさと教育の充実につながります。この事業が、町おこしとなり、町の活性化につながるものと、期待が高まるどころです。

町史編さん事業は、本年度で7年目を迎え、本の名称が『新和東町史』に決定しました。発刊は令和9（2027）年3月となります。また、昨年度から『新和東町史』掲載のため、仏像や絵画、古墳などの撮影をプロのカメラマンに依頼して進めています。

和東町史編さん室では、本年度も、引き続いて文化財等の現地調査、歴史資料の収集と調査整理・保管に努めるとともに、古文書講座を開催しました。広報『れんけい』への「編さん室だより」の掲載、ホームページの更新など、事業の成果を広くお知らせすることにも積極的に取り組んでまいりました。古文書講座や「編さん室だより」は今年度で終了となります。これまでのご愛顧ありがとうございました。

さて、令和元年度から刊行を始めた『資料調査報告書』は、本号で第5号となります。本号では、これまでの編さん室だよりの振り返り、祭礼調査の経過報告、東大寺での仏像撮影・調査の報告などを掲載しました。町史編さん事業の一端を知っていただければ、幸いです。

この間、調査にご協力いただきました各区長様をはじめ、ご所蔵の資料を提供いただきました皆様に、厚くお礼申し上げます。引き続きまして、より一層のご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げ、第5号発刊に当たりましてのごあいさつとさせていただきます。

令和7（2025）年3月

和東町史編さん委員会

委員長 岡 田 善 行

1 編さんだよりを振り返る

令和4（2022）年7月から令和7（2025）年3月まで「広報れんけい」に「和東町史編さんだより」を第33回まで掲載しました。令和7年4月から『新和東町史』の編集作業に本格的に入ることから終了しました。振り返りとして全33回の内容を要約して掲載します。

第1回 「わづか」の地名はいつから

「わづか」の地名が歴史の史料に初めて登場するのは奈良時代の歌集『万葉集』です。『万葉集』の巻3にある大伴家持が17歳で死去した安積親王を悼んで詠んだ和歌に「わづか」がでてきます。天平16（744）年2月3日に安積親王が和東山に葬られたときに作られたものです。

第2回 和東杣山

和東は杣山として知られていました。「杣」とは宮殿や寺院の造営や修理のための材木を採る山のことで、和東は興福寺の杣でした。伐り出した木材は木屋まで陸路を下ろし、いかだに組んで木津川を下し、木津で陸揚げして、奈良まで運ばれました。

第3回 鎌倉・室町時代の和東

興福寺の杣山として栄えた和東ですが、鎌倉時代中期になると興福寺の支配に抵抗する動きが現れ、文永9（1272）年から翌年にかけて、和東杣の「悪党」栄氏は興福寺と合戦を重ねた末、退散させられました。このころの和東は奈良と信楽方面とを結ぶ交通の要所となっており、撰原峠の子安地藏（1267年銘）や白栖の弥勒磨崖仏（1300年銘）などの石仏は、街道の境界を守るものとして造られたとも考えられています。鎌倉時代末には後醍醐天皇が都落ちして東大寺に逃げ、ついで金胎寺に移り、さらに笠置寺に立て籠もるという事件の舞台ともなりました。室町時代、天文17（1548）年8月、大和の筒井順昭の軍勢が和東の御屋形様の城を攻め、切腹させたという記録が残っています。その後、和東の喜多氏が松永久秀の軍勢に属し、大和郡山の筒井順慶勢と戦っています。



弥勒磨崖仏（相楽東部
広域連合指定文化財）

第4回 14ヶ村で和東郷

江戸時代には現在の大字となる白栖村・石寺村・撰原村・下島村・木屋村・杣田村・南村・釜塚村・別所村・原山村・門前村・中村・園村・湯船村の14ヶ村がありました。元禄15（1702）年に開拓された現井手町の田村新田も明治22（1889）年までは和東郷でした。元和9（1623）年、和東郷は天皇家領地の禁裏御料になります。杣田山中には、「禁裏御料」と書かれた切山村との境界石が現存しています。大坂城への門松、京都御所への高麗柿、大嘗祭への材木は和東郷14ヶ村で納めており、和東郷という地域的まとまりがありました。



杣田・切山村
境界石

第5回 14ヶ村から4ヶ村へ

明治維新後の明治22（1889）年4月、市町村制施行により和東郷14ヶ村は西和東村、中和東村、東和東村、湯船村の4ヶ村となり、田村新田は井手村に編入されました。ただ、江戸時代と同じように大正・昭和の大嘗祭では和東郷で材木を納めています。時代や制度が大きく変わっても、地域的まとまりは変わりませんでした。

第6回 釜塚・石寺の人形浄瑠璃

和東町では釜塚の巽座と石寺で人形浄瑠璃が演じられていました。釜塚の巽座は幕末の元治元（1864）年に始められましたが、昭和初期には衰退しました。石寺の人形浄瑠璃は明治から大正にかけて行われていたようですが、詳細はわかりません。釜塚、石寺に残る人形首や衣装などの人形浄瑠璃用具は、京都府登録文化財になっています。

第7回 和東町誕生

昭和28（1953）年8月14日の晩から15日未明にかけての集中豪雨によって南山城水害が発生し、和東川の氾濫によって和東郷4ヶ村は大きな被害を受けました。各村単独での復興が難しいことから和東郷4ヶ村は合併を進めていきます。昭和29（1954）年12月15日、湯船村との話し合いがまとまらなかったため、一旦は西和東村・中和東村・東和東村の3ヶ村が合併して和東町が誕生

します。その後、湯船村との話し合いもまとまり、昭和 31 (1956) 年 9 月 30 日、湯船村も合併して、現在の和東町が誕生したのです。

第 8 回 和東川の通船計画

宝暦 9 (1759) 年、湯船村が中心となって和東川の通船が計画されました。湯船から井平尾村の浜 (現木津川市加茂町) まで、高瀬船を通そうというものです。しかし、工事は難航し、50 年経過しても完成していません。文政 5 (1822) 年に湯船から下河原 (現白栖橋付近) までは通船できるようになったようですが、井平尾まで下ることはできませんでした。

第 9 回 安積親王墓治定をめぐって

明治 11 (1878) 年、釜塚村の人が茶畑開墾のため太鼓山頂上を掘ったところ、平石や土器の破片などが出てきました。村人達が調べていくと「安積王墳」と書かれた絵図が見つかります。その絵図を根拠として、太鼓山古墳は宮内省に安積親王墓として治定されます。しかし、絵図の詳細については未だ不明な点が多くあり、根拠の部分はあいまいなままです。

第 10 回 和東の小学校のうつりかわり

和東では明治 6 (1873) 年 5 月に釜塚小学校が開校します。現在の町役場付近、南山城水害まで中和東小学校があったところに設置されました。釜塚校は和東郷全域を校区としましたが通学に時間がかかることから、各地区につきつぎと小学校が開設され、明治 22 (1889) 年には西和東・中和東・東和東・湯船の尋常小学校 4 校の体制が整います。その後、高等小学校の併設や国民学校への改称を経て、戦後に小学校となりますが、4 校の体制は変わりませんでした。しかし、平成 4 (1992) 年 4 月に 4 校は和東小学校に統合されました。

第 11 回 町営結婚式

戦後、生活合理化・簡素化が進められますが、具体的な活動の一つとしてあったのが公営結婚式でした。和東町でも婦人会の働きかけによって、社会福祉センターを式場とした町営結婚式が昭和 47 (1972) 年から始まります。会場が町の施



町営結婚式花嫁衣裳 昭和 47 年

設で、結婚式の各役割を役場職員が担うことによって、格安で式をあげることができ、花嫁衣裳も無料もしくは格安で貸し出していました。昭和47年から昭和56（1981）年までに約200組が挙式を行ったとされています。しかし、時代と共に段々に行われなくなっていったようで、平成5（1993）年9月に行われた式が、確認できる最後の町営結婚式です。社会福祉センターは取り壊されましたが、花嫁衣裳は現在、町史編さん室で保管しています。

第12回 江戸時代の和東川水害

宝暦6（1756）年9月16日夜の和東川洪水では下島村の古橋が流失しました。また原山村や柚田村では、田畑に土砂が入ったことから、年貢の減免を要求しています。明和8（1771）年の水害では、釜塚村で一部の田地に土砂が入り込み、2年たっても作付けができないという被害が出ました。享和2（1802）年6月28日の台風では、各地で井堰や用水路、農道などが損壊したことから、村人たちは京都代官に対して現地の見分をするよう訴えています。慶応4（1868）年は5月12日に川原橋と柚田村長井の石橋とが流失しました。川原橋は長期間復旧せず、人馬の往来に難儀しました。

第13回 和東天満宮の鐘

和東天満宮隣には明治時代まで、石段を上った鳥居の先に大宮寺というお寺と鐘がありました。現在も天満宮にある鐘は、大宮寺の鐘なのです。鐘には文字が彫られており、寛文3（1663）年につくられたものであること、鐘をつくったのは京都三条釜座の職人であったことなどが分かります。大宮寺は明治6（1873）年、釜塚小学校に建物が移築され、鐘もその際に現在の場所に移動したのではないかと思います。その後、戦争中に金属供出されることもなく、鐘が出来てから360年間、残り続けています。



大宮寺の鐘（和東天満宮境内）

第14回 南山城水害から70年

昭和28（1953）年8月14日夜から15日早朝にかけての集中豪雨により発生

した南山城水害から 70 年になります（令和 5 年当時）。総雨量 400mm を超える豪雨となり和東川が決壊し、中和東村で 101 人、東和東村で 6 人、西和東村で 5 人の死者・行方不明者を出すという甚大な被害をもたらしました。湯船村は 0 人でした。和東川沿いの道路が通行できなくなったことから、救援部隊は木屋峠や加茂町奥畑を越えて徒歩で物資を運びました。また、アメリカ海兵隊のヘリコプターが木津高等学校を基地にして、被災各地に物資を届けました。

第 15 回 幻の鉄道

大正 12（1923）年、京都府加茂駅から滋賀県貴生川駅までの鉄道工事を翌年から始めることが決まりました。和東は、その鉄道のルートにあっていたようです。しかし、同年 9 月 1 日の関東大震災、たび重なる内閣の交代、財政整理などで計画は進みませんでした。昭和 8（1933）年の資料には延期に至ったと書かれています。これは実質的に計画の中止であったと言ってよいでしょう。その代わりとして持ち上がった計画が京都府加茂駅から滋賀県信楽駅までの省営バス近城線でした。こちらの方は計画が進んでいき、昭和 15（1940）年に省営バス近城線が開通します。



「加茂・貴生川間鉄道請願関係書類」(和東町役場蔵)

第 16 回 水害の記録を伝える

昭和 28（1953）年は 8 月 15 日の集中豪雨に続いて、9 月 25 日に 13 号台風が来襲しました。二度の被害体験はいろいろな記録を残しました。中和東小学校では作文集『あけぼの』の特別号を作成し、みずからの体験を綴る作文とともに犠牲となった 12 人の学友への追悼文を掲載しています。小学生の作文集である『いずみ』（当時は相楽郡国語教育研究班発行）は、「水害特集号」として発行されました。写真集も数種類が作られました。和東町でも昭和 48（1973）年に『南山城水害 回顧する 20 年』の記念誌を作成しています。

第 17 回 福塚古墳

福塚古墳は和東天満宮の西に現存する高さ約 5 m、直径約 24m の円墳です。

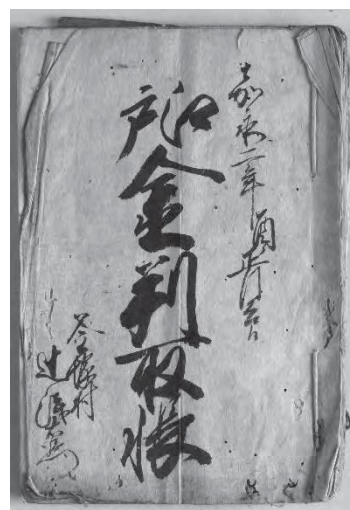
北東側は過去の土取りのため大きくえぐられており、石室が露出しています。表面から6世紀前半の埴輪のかけらが発見され、円筒埴輪や形象埴輪が立ち並んだ古墳であったことが分かりました。現存していませんが、福塚古墳の東側には園大塚古墳、原山古墳があり、天満宮周辺は古墳が集中する場所でした。天満宮のある場所は尾根の上なので、地形的な理由から当時の人々は古墳をつくる場所として選んだのかもしれませんが。

第18回 江戸時代の和東でも海の魚を食べていた

幕末、文久3（1863）年2月の釜塚村の婚礼にともなう買い物の記録の中に購入した魚介類が書き上げられています。大鯛2枚、大いな（ボラの幼魚）120、かまぼこ（ちくわを含む）80枚、大鰯4本、大々ふか目方7貫目（約26kg）、たこ5はい、大ゑ（え）い2枚、はまぐり、色板取合（板付かまぼこ）30枚とあります。エイを食べていたことがわかります。別に大阪行きの費用や運ぶ人の賃金が計上されていますので、大阪で魚を購入し、和東まで運んできたのでしょう。

第19回 和東と江戸のお茶取引

嘉永2（1849）年の江戸とのお茶取引を記録した帳簿を見ると、取引の中心にいた人物は釜塚村の浅右衛門でした。浅右衛門は集めたお茶を江戸の商人山本嘉兵衛らに送り、その代金を受け取って、和東郷内の茶商達に渡すという和東と江戸をつなぐ役割を担っていました。取引額は年間総額で約2千両に及び、多額のお茶とお金が和東と江戸でやり取りされていました。帳簿に押されたハンコには「城州宇治和東」という文字が見られ、19世紀半ばには宇治という名称が和東のお茶に使われていました。



嘉永2（1849）年 江戸金判取帳
（相楽東部広域連合蔵）

第20回 「祝橋」の由来を考える

祝橋の名前の由来については、後醍醐天皇が鷲峰山から笠置山にうつる際に人々が和東川に橋を架けて、天皇を無事に渡したことを喜び「祝井橋」と名付

けたと言い伝えられています。改めて「いわい（いわう）」を辞書で調べると本来は「身を清めること」という意味だったとされています。祝橋の場所は、かつては木屋浜から北上して神社に参る人や鷲峰山に登る山伏たちが、和東川の水で身を清めた場所で「いわいば」と呼んでいたのではないかと思います。そこに橋が架けられ、「いわう」の意味が変化して「お祝いする」の意味になってから、後醍醐天皇の伝承が生まれたように思われます。

第21回 和東の古墳出土品

天満宮西側の福塚古墳からは6世紀前半の埴輪のかけらが出土していますが、中区の大杉古墳からは5世紀後半～6世紀前葉の人物埴輪が出土しています。天満宮東側の原山古墳からは5世紀後半当時の最新の技法が使われた甲冑などが出土しています。中区の二本一古墳からは6世紀前半の須恵器が出土しています。門前の三本柿ノ塚古墳からは5世紀末の須恵器や鏡などが出土しています。和東は5世紀後半～6世紀前半に古墳が集中しており、この時期に和東が開発されたことを示しているのだと考えられています。



大杉古墳出土人物埴輪（個人蔵）

第22回 和東の俳諧

『鷲峰山奉額発句集』と題された、幕末に作られた句集があります。発起人として「慈弓」の名前が見えます。慈弓は、釜塚の田中清左衛門の俳号です。この発句集に句を寄せたのは、澤樹徳兵衛こと一朝や、辻家の蝶楽など和東の人々だけでなく、瓶原、伏見、難波や堺などの俳句をたしなむ人たちです。江戸時代後期から明治にかけて、和東では俳句が盛んであり、その背景には、茶業による経済的な発展があったものと推察されます。

第23回 和東の砥石

『日本山海名産図会』という寛政11（1799）年に出版された日本各地の産

物を解説した本に砥石が採取される場所として、和東の杣田、南村、門前、中村、湯船が登場しています。和東町内の砥石に関する古文書には原山や白栖も登場します。江戸時代の砥石採取の古文書には契約相手として大坂の商人もいます。大坂の商人も和東の砥石を採りたがっていたことがわかります。

第24回 三宅先生の墓碑

南の正法寺の墓地のほぼ中央に「三宅南峯先生之墓」と刻まれた石碑が建っています。三宅南峯は明治6（1873）年5月に開校した釜塚小学校の教師「三宅稔一郎（すいいちろう）」のことです。三宅は天保11（1840）年に京都に生まれ、維新の混乱を避けて南に移住し、寺子屋を開きました。釜塚小学校が開校されると教師となり、明治37（1904）年まで和東で勤務しました。晩年は京都に帰り、大正2（1913）年11月30日に亡くなります。墓碑は和東での門下生が大正11（1922）年に建立したものです。



三宅先生墓碑

第25回 和東の神社と荘園に関係あり？

和東天満宮境内北側にある春日神社は江戸時代の建物で現在、天満宮の末社となっていますが、創建は天満宮より古く、和東郷の総社だったとされています。和東郷は平安時代に春日神社（現在の春日大社）と一体だった興福寺の荘園になっています。和東に春日神社が創建され、総社となったのは興福寺（春日神社）の荘園だったからではないでしょうか。その後、鎌倉時代以降に和東は北野天満宮の荘園にもなっています。そこから段々と北野天満宮の力が強くなっていき、和東の総社も春日神社から、室町時代に建てられた和東天満宮へと移り変わっていったのではないのでしょうか。

第26回 雨乞いの作法

嘉永5（1852）年、和東郷各村は雨乞いの祈願をしましたが効果はありませんでした。このため天満宮で雨乞いの「笹の葉踊り」を三日三晩続けましたが降雨はありません。さらに和東郷中からの千度参りや子供相撲を実施しました。

それでも降らなければ、「花踊り」を奉納することになっていたようです。嘉永6（1853）年も南村では「笹の葉踊り」や「花踊り」を実施しましたが、効果がありません。そこで、正法寺に伝わる「仏舍利」に祈願したところ雨が降りました。各村々で雨乞いを行い、降らないと和東郷全体としての祈願を天満宮で行うという雨乞いの作法があったことがわかります。

第27回 和東の石灰

和東の石灰採取に関する古文書は19世紀前半に時期が集中しており、その時期に石灰が盛んに採られていたのかもしれませんが。昭和8（1933）年に当時の学校の先生たちが作成した和東郷鉱物誌によれば石灰が採れる場所は鷲峰山麓と湯船村殻池峠西方で、鷲峰山の周辺から石灰が採れたことがわかります。

第28回 法然上人霊場の地域巡礼

湯船の西願寺と応源寺、撰原の長福寺は、浄土宗の開祖である法然にゆかりのある25か所の霊場寺院を巡礼する「南山城元祖廻り」の寺院です。門前に「円光大師廿五拜」と刻まれた石碑が建っています。円光大師は、法然の大師号です。「南山城元祖廻り」は、天保13（1842）年秋の彼岸に、西願寺と木津川市山城町椿井にある阿弥陀寺とが発起人となって、始められました。



西願寺の地域巡礼碑

第29回 明治初期の和東天満宮祭礼

和東天満宮祭礼の明治9（1876）年の記録を見ると村（現在の大字）ごとに座割（席割）があり毎年変わること、熊野神社から天満宮本殿に神輿が移動すること、稚児が出ることなどが確認できます。明治時代は15ヶ村が祭礼に参加し、15ヶ村の中には田村新田もありました。稚児はその年の当番5ヶ村から出ていました。

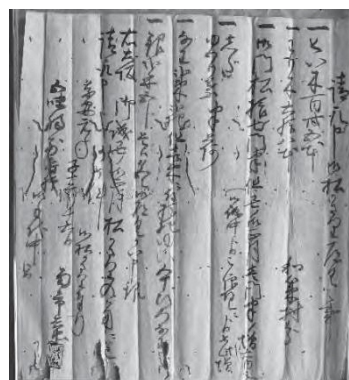
第30回 30年前の木屋

30年前の平成6（1994）年、近畿大学が木屋地区を調査した報告書が作成さ

れました。タイトルは『木津川の民俗』、その第1部が「木屋の民俗」で、90ページにわたり、大正・昭和の木屋地区の姿が詳しく記録されています。結論として「まさに和東の発展は木屋（舟運基点としての『浜』）に負うところが大きかった」とあります。本書は、町史編さん室で閲覧できます。

第31回 大坂城に送られた門松

和東は江戸時代の間200年以上、毎年大坂城に門松を納めていました。宝永3（1706）年、門松を納めるのをやめたいと願ったこともあるようですが、途切れることなく幕末まで納めています。また、木屋から船で門松などを運んでいたことも古文書からわかります。



慶安元（1648）年

松かざり受取状（個人蔵）

第32回 和東八景

和東八景は幕末期に、^{じゅぶざんせつ}驚峰残雪、^{かんびょうばんしょう}菅廟晩鐘、^{なんそんりう}南村犁雨、^{さんがくれんうん}三嶽練雲、^{けいりゆうちよう}溪流朝靄、^{あいさんそうぼえん}山莊暮煙、^{こほうめいげつ}孤峰明月、^{しんしょうせいふう}神松清風が選ばれました。驚峰山の残雪はわかります。菅廟は菅原道真をまつる天満宮のことで、今も境内に梵鐘があります。南村犁雨は田畑を^{すき}犁で一かきするくらいの深さまで湿らす雨のことです。三嶽練雲は三ヶ岳にかかる雲のこと、溪流朝靄は和東川の朝靄でしょう。孤峰明月の孤峰はどの山でしょうか。神松は、天満宮の神が降りたという門前宮野の松でしょう。山莊暮煙はよくわかりません。

第33回 『新和東町史』発刊に向けて

『新和東町史』は全2巻で、第1巻は考古・古代・中世・近世・近現代の通史編、第2巻は自然環境・地理景観・建築・宗教美術・祭礼・食文化・茶業史のテーマ編となり、両巻とも令和9（2027）年3月に完成します。『新和東町史』にはこれまで和東町の歴史として語られてきたことと大きく違う新たな成果も盛り込まれています。これまで和東町史編さんだよりのご愛読ありがとうございました。また、どこかでの復活を願いつつ。

2 祭礼調査



おしよらいさんお迎え



おしよらいさん供物

和東町史編さん室では令和5（2023）年度から京都府立大学上杉和央准教授の指導の下、祭礼調査を始め、5年度は白栖の勧請縄、園の観音寺大根炊きの調査を行いました。

令和6（2024）年度も引き続き、和東町役場地域力推進課の協力も得ながら祭礼調査を進めました。6年度に行った祭礼調査は、中の祇園祭、園・南・門前の滝祭り、湯船のおしよらいさん、撰原の地藏盆、石寺・杣田・南・釜塚・いきいきこども館のトンドとなります。

祇園祭は7月7日、中の八坂神社で行われ、子ども達にお菓子の配り物もありました。

滝祭りは地域によって日程に違いはあるものの7月下旬から9月初めにかけて各地域の水源地である滝で祭礼を行うものでした。

おしよらいさんは各家庭で8月13日に先祖の霊をお迎えし、15・16日に送るというもので、火を焚いたり、お供え物が仏壇に置かれます。

地藏盆は8月末に行われ、撰原では子安地藏など3ヶ所の地藏で行われる祭礼でした。

トンドは1月14日前後に各地域で行われる行事で正月の飾り物などが燃やされます。

調査を行う中で明らかとなってきたのは、祭礼の規模が年々小さくなっているということでした。滝祭り、地藏盆、トンドは昔ほど盛大に行われることは無くなり、地域によっては開催自体が無くなってしまったところもあります。昔は子ども達が多く参加していたが今は子どもの数が減ってしまったとい



トンドで燃やされる正月飾りなど



こども館のトンド

うのは、どの地域でも話されていることでした。

お盆のおしらいさんは自分達の世代がいなくなったら昔からのやり方は無くなるだろうと話す高齢者の方もおられました。しかし、現在でも多くの家庭で8月13日から15・16日にかけておしらいさんの行事が続いていることは和東の「伝統」の継承が続いていると言えるのではないのでしょうか。

また、トンドが多くの地域で、ほぼ同じ日の同じ時間帯に少人数でも行われていることは地域のつながりが残っていることを感じさせられる事例であるように思われます。

地域の祭礼は変化していったり、いずれ無くなっていく可能性もありますが、だからこそ今現在の状態を記録し、伝えていくため『新和東町史』に掲載する必要があるように思います。

最後となりますが、祭礼調査において、快く協力していただいた皆様に感謝申し上げます。

3 東大寺俊乗堂愛染明王坐像の調査

現在、奈良市の東大寺俊乗堂に安置されている木造愛染明王坐像は、かつては鷲峰山金胎寺の多宝塔の本尊であったと伝えられています。

町史編さん室では、東大寺の許可を得て、令和6年(2024年)9月19日に、愛染明王坐像の調査と写真撮影を行いましたので、概要を報告します。

俊乗堂は、治承4年(1180年)12月の平重衡の焼き討ちによって炎上した東大寺の再建に尽力した、大勧進職の俊乗房重源(1121~1206)をまつる御堂です。現在俊乗堂があるところは、もともとは重源上人が建立した浄土堂があった場所です。この堂は永禄10年(1567年)に兵火で類焼しましたが、元禄17年(1704年)に公慶上人が重源の功をたたえ菩提を弔うために建立したのが、俊乗堂です。

俊乗堂の愛染明王坐像は、平安時代後期の作風を示しており、重要文化財に指定されています。平安時代にさかのぼる愛染明王像は少なく、貴重な作例です。像高は96.1cm、寄木造で漆を塗った上に金箔を押す漆箔像で、彫眼でさらに額の中央にも目がある三目で、腕が六本ある六臂^{ろっぴ}像です。忿怒の相、怒った顔をしています。

金胎寺の多宝塔は、鎌倉時代に建立されたものですが、本像が本尊とされた経緯については、わかっていません。

現在、愛染明王坐像は、江戸時代の安永9年(1780年)に東大寺で作製された厨子に納められています。本像が東大寺に移った経過については、この厨子の扉の内側に書かれた銘文に、概略次のようなことが書かれています。

本像は、もともと鷲峰山寺の多宝塔に安置してありましたが、乱世の時代に兵賊による難を避けるため、和束郷の某家にひそかに移されました。そして、その家で子々孫々と伝えられてきました。江戸時代の明暦年中(1655~58年)になり、東大寺金珠院の実清法印がこの像を拝見して歓喜し、寄進を受けました。さらに実清の親類の者が、この像に皈依することによって家を興すことができたので、台座と光背を奉納しました。正徳年間(1711~15年)に、庸性法印が金珠院内に明王殿を建てて、本像をまつりました。そして安永9年(1780年)になり、公祥法印が、厨子を作り、明王像を納めました。

厨子の銘文は、公祥によって書かれたものですから、明王像を厨子に納める

にあたって、経緯を記して、後世に残そうとしたのでしょう。その後、明治維新に際して金珠院は廃寺となり、明王像は俊乗堂に移されました。このような経過により、金胎寺の愛染明王坐像が、現在東大寺に安置されているのです。ただ、このことを裏付ける他の資料はありません。明王像を預かっていたという和東郷の某家についても、手がかりはありません。情報をお持ちの方は、ぜひお知らせください。

今回、町史編さん室で実施した調査は、編集委員の井上一稔同志社大学教授が担当されました。東大寺の方々にも御協力いただきました。調査の成果は、新しい和東町史に詳しく記述されることになっています。

東大寺の俊乗堂は、普段は非公開ですが、毎年、俊乗房重源の忌日である7月5日と、奈良時代に東大寺建立に尽力した良弁(689~773)の忌日の12月16日に公開されています。肖像彫刻の名品である国宝の俊乗房重源像とともに愛染明王坐像の御厨子も開扉されていますので、ぜひお参りください。

(文責：田中)

参考文献

- ・同志社大学歴史資料館『第1期南山城総合学術調査報告書鷲峰山・金胎寺とその周辺地域の調査』2002年、同志社大学
- ・奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』東大寺2、1968年、岩波書店
- ・根立研介『愛染明王像』日本の美術376、1997年、至文堂



東大寺俊乗堂（東大寺提供）



木造愛染明王坐像



調査風景

4 町史編さん室から 令和6年度の事業

(1) 名称が決まりました。

和東町史全2巻の名称が決まりました。名称は『新和東町史』となります。

(2) 事業の終了

これまでご愛顧いただいていた古文書講座や町史編さんだよりですが、令和6年度で終了となります。ご参加、ご愛読ありがとうございました。編さんだよりは当報告書に全33回の要約を掲載しています。これらの事業は『新和東町史』発刊後に復活を目指しています。

(3) 編集委員による悉皆調査

今年度から町史本編の執筆作業が始まったため調査の数は少なくなりましたが、小林委員長による和東町行政文書の調査、上杉委員による祭礼・景観調査、井上委員・國賀執筆者による宗教美術調査などが行われました。祭礼調査の詳細は「2 祭礼調査」を参照ください。

(4) 宗教美術・古墳などの撮影を進めています。

前年度からプロのカメラマンに依頼して、仏像などの宗教美術や古墳の撮影を進めています。来年度もこの撮影は継続します。東大寺での撮影については「3 東大寺俊乗堂愛染明王坐像の調査」を参照ください。

(5) 町史編さんだよりの掲載について。

本年度掲載の内容は、次のとおりです。前述しましたが、今年度で最終回となります。なお、ホームページにも掲載しています。

- | | | | |
|------|--------------|------|----------------|
| 第22回 | 和東の俳諧 | 第23回 | 和東の砥石 |
| 第24回 | 三宅先生の墓碑 | 第25回 | 和東の神社と荘園に関係あり？ |
| 第26回 | 雨乞の作法 | 第27回 | 和東の石灰 |
| 第28回 | 法然上人霊場の地域巡礼 | | |
| 第29回 | 明治初期の和東天満宮祭礼 | | |
| 第30回 | 30年前の木屋 | 第31回 | 大坂城に送られた門松 |
| 第32回 | 和東八景 | 第33回 | 『新和東町史』発刊に向けて |

資料調査報告書 第5号

発行日 令和7年(2025)3月31日

編集 相楽東部広域連合教育委員会
生涯学習課和東町史編さん室

TEL 0774-74-8952 FAX 0774-74-8953

発行 相楽東部広域連合教育委員会
〒619-1205

京都府相楽郡和東町大字中小字平田23-1

TEL 0774-78-4335 FAX 0774-78-4338

ホームページ <http://www.union.sourakutoubu.lg.jp>

印刷 株式会社 春日